

崇武館
館長 飛鳥宗一郎
(宗雄)

先人の言葉から学ぶ（その3）

世尊拈華 迦葉破顔微笑

出典・・・大梵天王問仏決疑經

はじめに

今月のテーマは、仏教の始祖であり、ユネスコ世界遺産に登録されているネパール国のルンビニで生まれた釈迦牟尼仏（BC643～383、ゴータマ・シッダッタ。以下、「釈迦」と略記）と、釈迦十大弟子の一人で頭陀第一（頭脳明晰、優れた理解度が一番）と言われ、釈迦滅後に法門を継いで最高指導者（二祖）となった摩訶迦葉（生没年不詳、マハー・カッサパ。以下、「迦葉」と略記）との間であったとされる至上の悟りの世界を示す説話から取り上げた。

この話は、単に釈迦と迦葉の子弟関係における濃密さを主旨とするのではなく、修行上肝心の綱要をなす本体に関するところがある。



釈迦牟尼像

私は、空手道を習得するに通信教育やDVDなどの独習で成就するとは思っていない。これは、空手道以外の武道や習い事、芸事だって同じである。

目的を叶える環境として、道場、稽古場、ジム（ボクシング）や教室があって、その場には師範や教師、それにコーチなどの指導者がいて、先輩、同輩、後輩などによって集団（グループ）が形成される。

一層上達しようと思えば、常に指導者等から得る情報を鋭敏にキャッチし、仲間から支援を得て順次歩を進めるのが普通である。

しかし、同じ努力をしても達成度に個人差が生じるのは仕方がない。そこで、効果的に学ぶためには、受容体であり機能体である自分自身が内外の条件整備をすることで、よりスムーズな進捗が可能となる。

努力ということは、身体的な励みとともに、精神的な受入れ態勢を整えるという、二つの要件をもって成立するので、是非今回のテーマからヒントを得てほしい。

ただ、又もや仏法かと敬遠されるのではと思うが、興味がなければ1. から4. までを飛ばし読みされて、5. 以降を読まれて結構かと思う。

1 拈華微笑の説話

今回標題とした『世尊拈華 迦葉破顔微笑』の説話は、略して『拈華微笑』（ねんげみしょう）というが、この説話を書かれている経典「大梵天王問仏決疑經」（だいぼんてんのうもんぶつけつききょう。以下、「問仏決疑經」と略記）に次のように記されている。

世尊 昔在靈鷲山会上 拈華示衆 是時衆皆默然 唯迦葉破顔微笑 世尊云 吾有正法眼蔵 涅槃妙心 実相無相 微妙法門 不立文字 教外別伝 付屬摩訶迦葉

現代語にして、現れていない部分を付加して意識すれば次のとおり。

釈迦が昔、靈鷲山（りょうじゅうせん）に登って大衆を前に説法されたとき、蓮の花をかざし指でひねって示したところ、大衆は何のことやら分からず黙り込んでしまった。ただ迦葉だけが相好を崩して微笑んだ。そこで釈迦が言われた。私には正しい智慧の眼を納める蔵（正法眼蔵）があり、涅槃（悟り）に導く何ものにも替え難い真実絶対なる法門（仏の教え）がある。この法門は言葉によらず、文字によっても教えられない（不立文字）微妙の教えである。この私の真実の法の一切を迦葉に伝授することにしよう。

更に、説明を付加するならば、

- ① この拈華微笑が記される経典の「大梵天王・・・」の梵天とは、「色界の初禪天」といって色欲界を離れた寂靜清淨の天界の王で、煩惱に満ちた人間界を支配するとされている。

戦国から江戸時代初期にかけ猛将といわれた伊達政宗は、幼名を「梵天丸」と呼んだが、梵天には御幣（神具の一つで、幣束ともいう）の意味もあって、これは政宗の母・義姫（最上義光の妹）が文武両道の世子が授かるよう湯殿山に祈願したところ、夢枕に現れた白鬚の神から『御幣を護持（大切に守ること）せよ』と告げられ、間もなく懐妊したことに由来するもので、双方の意味は異なる。

- ② 「世尊昔在・・・」の時期について、この「問仏決疑經」の説法は釈迦が示寂近いことを悟られ、大衆を前にして行った最後の説法だと記している。

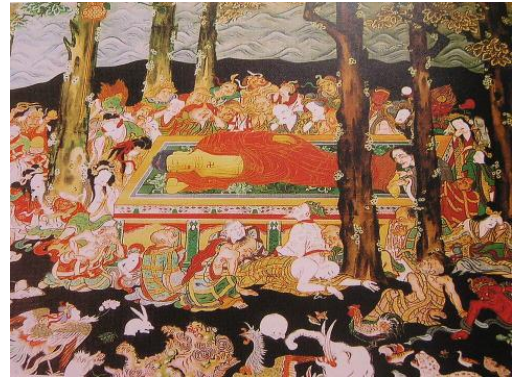
ワンポイントレッスン今年1月号では、「慙恥質直」（ざんちしつじき）と題して「佛垂般涅槃略説教誡經」（ぶつしはんねはんりやせつきょうかいきょう。以下、「遺教經」と略記）の言葉を取り上げたが、「遺教經」の内容は釈迦が既に身を横えられてから述べられた遺言に相当とする言葉であって、十大弟子の一人で多聞第一（「釈迦の説法を最も多く聴き記憶した」意味）といわれた阿難陀（アーナンダ、生没年不詳。釈迦の従弟といわれる）が記憶した経文である。

この靈鷲山の説法は、「遺教經」より前に大衆を前で行った最後の説法となる。

- ③ 拈華した花は、仏教守護神の大梵天王から授かった金波羅華（こんぱらげ）という金色の蓮の花。

2 釈迦と迦葉

冒頭で釈迦牟尼仏と書いたが、釈迦は世尊、釈迦如来、ブッタ（仏陀）などと尊敬の念をもって呼ばれていた。釈迦は、ネパール国のシャーキャ（釈迦）族との王子として生まれ、王位継承者として養育された。29歳の時に感ずるところあって出家し、厳しい苦行を積むが解決に至らないことを察して、新たに固い決意をもって観想に入り、壮絶な苦闘を経て35歳の12月8日未明に大悟した。



釈迦涅槃絵図

その後は、自らの悟りと真実法門の世界を語り人々に説いて廻るが、その範囲はガンジス川中流域を含む広大な範囲に及んだといわれる。

布教のため生涯を捧げた釈迦も、激しい腹痛に襲われマルラ族マツラ国の2本の沙羅（沙羅双樹という。「ふたばがき科」の常緑高木で「夏ツバキ」ともいう）の木の下に横たわり、そこで80年の生涯を閉じられた。

世尊という言葉は、釈迦に対する固有の尊称であり、信服と尊崇の心をもって呼ぶ習わしである。ところが、麻原彰晃を教主とするオーム真理教（弁護士一家殺人事件や松本サリン事件、そして1995年3月の地下鉄サリン事件など、無差別社会破壊事件を起こした教団）では、麻原のことを世尊と呼ばせていると聞いた。この教団の不遜で思い上がった体質に対し、大いなる不快感と怒りを感じたのは大方の国民感情であった。



摩訶迦葉図

一方の迦葉は、釈迦十大弟子の一人で、「頭陀第一」と讃えられた教団の重鎮である。

迦葉は、バラモン（古代インドの民族宗教で、ヒンドゥー教の祖形）の家に生まれ、8歳でバラモンに入門して全ての教理を修得し、32歳で妻とともにバラモンに出家した。その後、樹下で瞑想していた釈迦に出会い、説法を聞き感銘を受けて仏弟子となった。

釈迦入滅後は、多くの弟子たちが生きる希望を失い、『釈迦亡きあとは、生きていても仕方がない』と世を去ろうとした。動揺を察した迦葉は、須弥山（しゅみせん）の頂に登り、仏弟子たちによる大集会「結集」（けちじゅう）を呼び掛け、『生き永らえて釈迦の教えを広めよう』と翻意を促したところ、集まった弟子たちは迦葉の呼び掛けに応え、その場において釈迦が生前語った数々の説法と、禁戒が確認された。

程なく、迦葉は釈迦亡き後の二祖となり、法門興隆に生涯尽力した。迦葉の後を継いで三祖となるのは、釈迦の遺言を記憶し後の人たちの語り、「遺教経」の元をなした阿難陀（阿難尊者）である。

3 拈華微笑の偽作説

この『拈華微笑』の説話が載る「問仏決疑経」は、様々な仏教経典の注釈書である「一切経」（大蔵経ともいう）には記載がない。

それに、この「問仏決疑経」は釈迦の死直前に大衆を前にした最後の説法として、迦葉との『拈華微笑』の場面を記している。しかし、他の仏典（「大般涅槃経」など）によれば、釈迦入滅時に迦葉はお側近くにはいないで遠隔地で修業していたというから、臨終の場には居合わせなかったことになる。しかも迦葉が釈迦の滅度を知ったのは7日後のことだった、というのが真実のようである。

更に、サンスクリット語（梵語。次項で詳述する）から漢語へ翻訳された仏典は、冒頭に翻訳者名が記載されるのが決まりであったのに、今に残る2種類の「問仏決疑経」には翻訳者名の記載がない。

では、なぜ「問仏決疑経」は存在するのか。理由として考えられるのは、中国南北朝時代、梁の武帝のとき（AC520年頃。他に472年来中との説あり）南インドから渡来し、釈迦から28代目の仏弟子と称した菩提達磨（ボーディダルマ、生没年不詳、達磨大師。以下、「達磨」と略記）により広められた禅仏教は、100年ほど経た唐時代初期頃から急速に興隆発展し、その後、他宗の教範や実証に対抗するため案出され、作者として有力視されているのは、唐の徳宗の末頃（AC800年頃）、陵（現・南京市）にいた僧で「宝林伝」などの禅宗史書を著した慧炬（或いは智炬）である。インド伝来の経典でないという「問仏決疑経」は、唐代末（AC900年頃）の仏典目録になりはじめて現れる。



菩提達磨彫像

宗教界では、既定の経典が絶対的な価値を持ち、威厳を誇るの宗門として当然と誰しも肯定できる。しかし、この『拈華微笑』が後の世の作話であったとしても、次世代の修行者を思い、必要として付加されたと考えれば、一概に否定できないのでなかろうか。

達磨が伝えて広まった中国の禅仏教は、後に五家と言われる曹洞、臨済、沩仰（いぎょう）、雲門、法眼と発展し、日本に伝来した後は曹洞宗、日本達磨宗、臨済宗、黄檗宗、普化宗となる。この説話の内容から、「正法眼蔵」「涅槃妙心」「実相無相」「微妙法門」「不立文字」「教外別伝」とあることで、「只管打坐」を修道法の中核とする、道元（1200～53年）が開祖となって広めた曹洞宗に行き着く。

「公案」（悟道のために言葉を与えて工夫させる）や「看話」（伝わる説話から工夫さ

せる)を主たる修道法とする栄西(1141~1215年)の臨濟禪とは、明らかに相違する。

4 仏教経典と使われた言語

仏教経典とは、釈迦が大きな悟りから得た真実を基に説いた言葉を、弟子たちが記憶して後世に伝えたものである。説法が成文化されるのは、釈迦滅後300年も過ぎた後という説もあれば、いやもっと早い時期から記録されていたなど、様々な説があつて定かでない。

使われた言語はサンスクリット語とって、古代から中世にかけインド亜大陸(大陸から突き出た大きな半島)から東南アジアまで広く行き渡り、公用語、文章語、雅語、宗教語(仏教、ヒンドゥー教他)、学術語として用いられていた。

言語学的には、インド・ヨーロッパ語族(印欧語族)のインド・イラン語派(アーリア語派)で、釈迦の存命中既に文法も確立されていた。ラテン語、ギリシャ語とともに「世界三大古典印欧語」と言われ、起源は紀元前1500年より以前とされている。

では、成文化がなぜ遅れたのだろうか。推測するに、釈迦の口から説かれた尊い言葉の一つ一つは、口から忠実に語り継がれるのを最優先とし、文字に置き換えても無意味(伝えきれない)と考えたからでなかろうか。

その考えは「大乘仏教」に引き継がれた。一方、なるべく早期に文字化しないと正しく伝わらないと考えたのが「上座部仏教」(旧呼称は「小乗仏教」)で、歳月を経るごとに両者の主張が隔たる原因の一つとなった。いずれにしても、過去の研究者たちに諸説があつて、拙速に結論付けられない諸々の問題を包含している。

紀元前3世紀頃にはセイロン(スリランカ)に伝わり、次第に国外に布教が進むにしたがい、言葉づかいや表現の違いから文字に書かれた経典の必要性が自然発生したことも、成文化促進につながっていく。

なお、中国には1世紀頃、日本には百済経由で538年に仏教は伝来している。

仏典の数は、一口に八万四千あると言われるほど多いが、全てが釈迦の言葉そのままでないことも明白であろう。

漢訳された経典のはじめに、『如是我聞』(私はこのように聞きました)と書かれるように、釈迦の説法を聞いた人たちの口から口へと語り継がれた事実がはっきり見えてくる。語り継がれれば、少しずつ違いがでるのも当然の現象といえる。

後の世になって、深く理解するための補完とか解説など付加されたとしても、何ら不思議はなく当然のことといえる。

したがって、「問仏決疑経」のように後の時代になって新たな経文が作られ定着するのは、宗門に対する手立てであり後進への親心からと思えば歓迎すべきかもしれない。

経典とは違うが、臨濟宗の「碧巖録」(中国宋代1125年頃)、曹洞宗の「正法眼蔵」(道元)とか「修証義」、も然りである。

5 以心伝心

「問仏決疑経」が『拈華微笑』の説話を生んだように、師弟関係とかグループ活動や学校の学びにおいても、心から心に伝わる意思の伝達は大切に受け止めていきたい。

実は、この『以心伝心』も『拈華微笑』から出た言葉である。「問仏決疑経」が書かれた以降に編纂された禅書には、『拈華微笑』が引用されている場合が多い。例えば『釈迦の滅後は、迦葉は釈迦から以心伝心をもって受け継いだ法門を説き・・・』(伝灯録)のような記載である。

ところが、西欧諸国の人たちみた日本人は、『以心伝心』を日常行為として持ち込み、国民性や個別性格の一つとして『このようにあってほしい』とか、『このようにありたい』と願うとき、言葉で顕さなくても察し合うのを美德としてきた歴史があると。

国際社会の中で共鳴や理解を得られないばかりか、これが日本人の短所の一つに数えられていることも知るべきであろう。これは、キリスト教国と仏教国の根本的な思想の違いの一部分といえる。

外国人からの評価は別として、文字や言葉、身振り(ジェスチャー)を用いなくても、相手に気持ちが伝わるのは、日本人ならかなりの人たちが経験し、その能力を有すると考えている。

『以心伝心』は、釈迦と迦葉の間にあったような、仏法の真髓伝達手段として存在したなどと難しく考える必要はない。大悟した高い次元の別世界にあった釈迦と迦葉の異空間は、我々凡夫は到底垣間見ることすらできないのである。

『以心伝心』は、我々の日常様々な場面で、より有効に作用するなら結構としなければならない。ただし、意識して相手の意思や気持ちを読み取ろうと試みるなら、真意の受け止めは絶対に不可能で、それは『以心伝心』にはならない。

無意識に心の響きあいが生じて、知らず知らず(意識外)のうちに確定的に伝わるのが『以心伝心』なのである。

この『以心伝心』には、ある条件が伴うのも確かである。見知らぬ人や疎遠な関係では期待できないし、組織や慣習の異なる立場にあっても発生しない。

したがって、同一価値観を持つ集団や身内などに『以心伝心』の通じ合いが多いとするなら、空手道を学ぶ同士で、特に師弟関係の中に有効に働かせれば修練を促進できる可能性がある。

真剣に学ぼうと真摯な行動を続け、間柄が深まり互いに頑張ろうとする気持ちが一致したとき、予期せぬ上達が期待できるかもしれない。

人心はそんな不思議な力を持ち、心ある者同士は互いにつながりあって生きていると私は信じている。

特に顕著なのは、親子の間柄であろう。空手道の世界を見渡せば、和道流・大塚博紀(初代)→大塚博紀(二代目。旧名・次郎)、糸東流・摩文仁賢和→摩文仁賢栄、糸洲流・坂上隆祥→坂上節明、剛柔流・山口剛玄→山口剛史、上地流・上地完文→上地完英など、親から子へと相伝された著名な空手家がいる。

5 一を聞いて十を知る

聖徳太子は一度に十人の話を聞き、それを過たずに理解して適切な処置をすることできたと伝わる。世の中には、他にも『一を聞いて十を知る』人がいて不思議はない。

『一を聞いて十を知る』、『一を聞いて万を知る』、『一を聞いて万を悟る』、これらは諺として使われるが、少しのことを聞き知っただけで、他の全てのことが分かる理解の早さや正確な洞察力を形容する言葉である。

古来より、『衆に優れる』とか、『一を聞いて十を知るご器量』などは、人を評価する褒め言葉として使われてきた。

『一を聞いて二を知る』の譬えもあるが、これなら普通の人でもできるから、特段に関連付けて論じる必要はない。

一つの言葉を聞いて、深く洞察し事柄の全てを察知するには、ただ単に目で見ても耳で聞いただけでなく、魂で接することである。『以心伝心』の場合と同様に、物事に対し熱心であり、前向きな姿勢、それに下地となる深い素養は肝心である。

『一を聞いて十を知る』ことできるなら、稽古事が渉ること請け合いで、誰しもかくありたいと願う。

稽古場でそれを実現するために必要な条件はただ一つ、『気概をもって臨む』である。そこには、教える側と教わる側の気持ちが一つになり、「教学一体」の場が生じるのからである。

6 阿吽の呼吸

「阿吽」はサンスクリット語で、「阿」(あ)は口を開いて最初に出す音、「吽」(うん)は口を閉じて出す最後の音である。

「阿吽」に関連して述べると、

- ① 宇宙の始まりと終わりを表わす。ギリシャ語でいうA(アルファ)とΩ(オメガ)と同じである。キリストの言葉として新訳聖書「ヨハネ黙示録」に、『我はアルパ(A)なり、オメガ(Ω)なり』の用例がある。アルファベットならAとZである。
- ② 仏教では「阿」を真実や求道心に、「吽」を智慧や悟りとか涅槃(煩惱から解脱した高い境地)を指すとしている。



阿形の仁王



吽形の仁王



沖縄のシーサー

- ③ 二つが対となる場合に用いられた。例えば、神社や狛犬、寺門の仁王像（金剛力士像）、沖縄県の屋根や門柱のシーサー（獅子）など、魔除けや宗教的なモチーフとして用いられ、口が開いている方を「阿形」、閉じている方を「吽形」と呼ぶのは仁王と同じ。
- ④ 二者が対峙し対決する場面の、呼吸やタイミングの合わせ方を表現する。大相撲の中継放送で『両者、阿吽の呼吸が合って立ち上がりました』など、よく目にする場面である。
- ⑤ 複数人が一つの目標をに向かっていているとき、多く語らずして時宜を得た絶妙な一致をもって行動することを指している。

これらについて、①～②は始まりと終わり、それに伴う世界観や悟りを。③なら洋の東西を問わず除災や呪術的な意味を持ち、獅子（ライオン）の偉大なる力借りるという象徴的な取り入れ方。④と⑤なら人間（動物の場合も）同士の相対関係において、ある目的達成への道程に關与する。

私がここで言いたいのは、空手道の練習や試合のときのタイミングなどでないことはお分かりと思う。共有する「場」における心得に關してである。

場違いの言動は齟齬を買い、他者と方向性が相違すれば食い違いが発生する。また、善意を欠く『阿吽の呼吸』を考えるなら世間は相手にしない。

人間関係の中には、『親しき仲にも礼儀あり』とか、『善行は人が見ていないところで行え』や、徳目といわれる良きお手本がある。心得違いがないように留意して行動すれば、おのずから『阿吽の呼吸』は分かるはずである。

朝、最初に顔を併せた時の『お早うございます』から、寝る時の『お休みなさい』まで、あるいは出会いから別れまで、誰とでも何処にいても『阿吽の呼吸』は生涯に及んで付いて回る必要欠くべからざる行為行動の一部となる。

人の世は、相手の立場になった気配りし、高邁な精神が身に備わるよう奮起する他に「道」はないかと思う。

7 一言アドバイス

『以心伝心』も『一を聞いて十を知る』も『阿吽の呼吸』も、有効に活用すれば願い事（目標）は叶うものです。

私たちが目指すのは、真実の武道とその精神であり、正統な空手道である。

空手道を学び、それを人生の糧にしようと思うらなら、まず空手道が『好きになること』である。『好きこそ物の上手なれ』は、空念仏でなく現実世界に付いて回る。

空手道に興味関心を持つ人は多数いるだろうが、最初から好きな人はいないと思う。俺まず弛まず続ける中で苦勞が多いとしてえも、後に訪れる喜びもまたひときわ大きくなると信じ、『以心伝心』『一を聞いて十を知る』『阿吽の呼吸』を肝に銘じて修鍊を続けてほしい。

（この項、おわり）